

化学系薬学部会から 第3回次世代シンポレクチャーシップ賞受賞講演旅行報告

南條 毅

Takeshi NANJO
京都大学大学院薬学研究科助教



筆者は第3回次世代シンポレクチャーシップ賞の受賞を受けて、2022年12月11日から6日間シンガポールへ渡航し、第11回シンガポール国際化学会議(The 11th Singapore International Chemistry Conference: SICC-11)での口頭発表と2つの大学を巡る講演旅行の機会をいただいた。

コロナ禍の影響もあり、30歳代半ばにもかかわらず海外での国際学会で発表したことがなく、恐る恐る渡航した筆者であったが、滞在初日から4日間はSICC-11に参加した。SICCはシンガポール国立大学(National University of Singapore: NUS)が主催で、シンガポールにおける化学の振興を目的としたイベントとして1999年に第1回が開かれ、以降隔年で開催されてきた。コロナ禍による2年間の延期を経て開催された今回の第11回会議では、著名な先生による基調講演だけでなく、多数の日本人若手研究者が招待講演者として参加しており、極めて活発な学会であった。会議期間中は朝8時から18時までひたすら講演が続く体力的にタフな会でもあったが、講演間のコーヒープレイクは長めに設けられており、多くの招待講演者の先生とお話することができた。筆者のペプチド合成に関する発表は最終日に設定されており、その頃には会場のにぎわいも少し落ち着いていた気もするが、それでも発表に対して多くの質問をいただき、初の海外での講演は何物にも代えがたい経験となった。

SICC-11の会期終了後の2日間で、筆者は南洋理工大学(Nanyang Technological University: NTU)とNUSをそれぞれ訪問した。2大学ともアジアで屈指のハイレベルな大学であり、滞在5日目にはNTUの伊藤慎庫先生にNTU構内を案内していただいた。地震の心配がないシンガポールでは有名建築家の作品が至る所に点在しているが、広大な



NTUでの講演会後の夕食会の風景

ホストの伊藤慎庫先生(中央)と筆者(右から2番目)。

NTUの敷地に並ぶ建物も負けず劣らず個性的であった。講演後の夕食では、伊藤先生に現地での生活からアカデミア事情まで様々なお話を聞かせていただいた。滞在6日間は、NUSのGe Shaozhong先生がホストで講演+NUSの4名の先生方とのディスカッションを実施するとともに、食事にも連れて行っていただき(気を遣っていただいたのか、昼食は予期せずお寿司!?)、プライベートな話も交えて親交を深められた。これら一連の日程を終え、さすがに疲労感もあったが、多くの土産話とともに無事帰国することができた。

以上講演旅行の概要を紹介させていただいたが、実際には1頁にはとても書ききれない程の濃密な時間を過ごし、国内外問わず多くの先生方と知り合い、交友を深められた6日間であった。そして再びこのような機会を得るためにも、日々の研究により一層邁進したいと気持ちを新たにすることもできた。本稿が今後国際的な活躍を目指す先生、学生の刺激になれば、誠に幸いである。

キーワード

次世代シンポレクチャーシップ賞、講演旅行、シンガポール、SICC-11

Copyright © 2023 The Pharmaceutical Society of Japan